宗像・沖ノ島 大国宝展

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群 世界遺産登録推薦決定記念事業

# 神宿る島「沖ノ島」で出土した国宝8万点 その一点一点が、日本の歴史をひも解くカギとなる

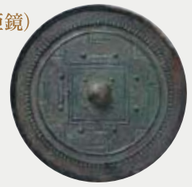
宗像大社は、玄界灘の中央に浮かぶ沖ノ島の沖津宮（おきつぐう）、本土にほど近い大島の中津宮（なかつぐう）、福岡県宗像市にある辺津宮（へつぐう）（総社）からなる日本でも有数の古い歴史を持つ神社です。祭神の宗像三女神は、天照大神から誕生した三柱の女神として『古事記』『日本書紀』にも登場します。四世紀から九世紀の間、東アジアにおける海を越えた活発な交流を背景に、大和朝廷による国家祭祀が沖ノ島で行われ、おびただしい量の貴重な奉献品がささげられました。

## 岩上祭祀 ［ がんじょうさいし ： 四世紀後半～五世紀 ］

10mを超える大きな岩を、神の降臨する磐座（いわくら）と考えられていた時代。この巨岩上や横の隙間部分から、銅鏡や鉄剣、勾玉などの宝物が発見されました。

### 銅鏡（方格規矩鏡）

［ どうきょう（ほうかくきくきょう）］



面径27.1cmに及ぶ超大型鏡で中央に方形の区画（方格）を置き、そのまわりにT･L･V形の模様を巡らしています。大和朝廷の国家祭祀に欠かせないものでした。

### 勾玉（硬玉）

［ まがたま（こうぎょく）］

勾玉は硬玉（こうぎょく）、碧玉（へきぎょく）、水晶、滑石をはじめ、大小様々な形状のものが各時代を通じて奉献されました。古い時代のものは石質もよく美しく、硬玉（ヒスイ）は白地の石にエメラルドグリーンが神秘的な雰囲気を漂わせています。

### 鉄剣

［ てっけん ］

「三種の神器」といわれる鏡、勾玉、剣が沖ノ島からは発掘されており、鉄剣も多く発見されています。古い時期は鉄製で実際に切れる実用品が捧げられており、多くが錆びて断裂した状態でしたが、破片を接合して復元できるものもあります。

## 岩陰祭祀 ［ いわかげさいし ： 五世紀後半～七世紀 ］

巨岩直下の陰になる部分を祭場とし、その地表部から沖ノ島神宝を代表する金製指輪や数多くの馬具類など、最も豪華絢爛な宝物が捧げられた時代です。

### 金製指輪

［ きんせいゆびわ ］

内径は1.8cm。純金のため、1500年の歳月を経ても色褪せることなく、当時の輝きを今に伝えています。側面の円文には赤や緑の宝石が入っていた可能性もあります。

### 金銅製棘葉形杏葉

［ こんどうせい きょくようがたきょうよう ］

沖ノ島からは銅に渡金を施した馬具類も多数発見されており、杏（あんず）の葉の形状で、先端部分が棘（とげ）状になっているため、棘葉形杏葉といいます。唐草文の優美な意匠が施されています。

### 金銅製歩揺付雲珠

［ こんどうせい ほようつきうず ］

馬の尻部を飾る装飾品で、枝状のつり手の先端に「歩揺（ほよう）」が下げられています。金銅製で奉献された当時は、歩揺がひらひらと揺れ、眩しく光を放ったことでしょう。

## 岩上祭祀から露天祭祀までの変遷を物語る「神宿る島」の国宝

沖ノ島で出土した8万点の品々のすべてが何故国宝に指定されているのでしょう。その理由は、沖ノ島で営まれていた祭祀の変遷とその時代ごとの背景が、この奉献品によって物語られているからなのです。

沖ノ島には二十三ヶ所の祭祀遺跡が現在確認されており、四世紀後半から九世紀末までの五百年の間に、祭祀の形態が岩上祭祀ー岩陰祭祀ー半岩陰・半露天祭祀ー露天祭祀という四段階に変わっていったことが明らかになっています。その祭祀でささげられた奉献品は、大陸や朝鮮半島からもたらされたものも多く、そういった経緯と奉献品の質や量から考察すると、沖ノ島祭祀が対外交流を背景として行われ、古代国家（大和朝廷）が関与した国家祭祀であったということを証明しているのです。

## 半岩陰・半露天祭祀 ［ はんいわかげ・はんろてんさいし 七世紀後半～八世紀前半 ］

巨岩直下に加え、日差しのあたる露天部分からも奉献品が発見されはじめる時代。露天祭祀への過渡期と考えられ、2地点しか確認されていません。

### 金銅製龍頭

［ こんどうせい りゅうとう ］

龍の頭をかたどった金具。敦煌の莫高窟（ばっこくつ）の壁画に用途が描かれており、竿先につけて口元から幡などをつり下げる金具とみられています。

### 唐三彩長頸瓶片

［ とうさんさいちょうけいへいへん ］

白色の素地の上に緑、白、褐色の釉薬が施された唐時代の陶器です。本品は長頸瓶の口縁と側面の装飾（メダイヨン）の破片です。（写真は口縁部）

### 金銅製雛形紡織具（榿）

［ こんどうせい ひながたぼうしょくぐ（たたり）］

榿（たたり）という糸掛けの用具をかたどった金銅製のミニチュア。榿をはじめとする紡織具のミニチュアは、伊勢内宮（ないぐう）の『皇太神宮儀式帳（こうたいじんぐうぎしきちょう）』（9世紀成立）記載の神宝や、現在の同宮の神宝と内容が共通する。

## 露天祭祀 ［ ろてんさいし ： 八世紀～九世紀 ］

巨岩群から離れ、完全に天を仰ぐ露天部分で祭祀が行われた形態。この時代になると同じ場所で複数回祭祀が行われ、祭祀の形式化（儀式化）が進んだ時代だと考えられます。

### 富寿神宝

［ ふじゅしんぽう ］

中国の貨幣制度にならい、大和朝廷が発行した銅銭の一つです。818年から鋳造された貨幣であることから、露天祭祀が九世紀まで行われていたことが判明しました。

### 滑石製人形

［ かっせきせいひとがた ］

人形は最も重い意味を持つと考えられている供物の一つです。両側に2箇所ずつ刻みを入れ、頭・胴・足を表し、中には目・鼻・口まで表現したものもあります。

### 奈良三彩小壺

［ ならさんさいこつぼ ］

唐三彩の技術をもとに日本で最初に作られた多彩釉陶器です。大和朝廷が技術を独占し、必要に応じて製作したとみられており、朝廷が沖ノ島祭祀を重要視した様子がうかがえます。

## 古代日本の面影が残る「神宿る島」沖ノ島 ゆかりの地

沖ノ島は日本と大陸における交流の航路上、道標となる島で信仰の対象となっていました。宗像では沖ノ島ゆかりの地が今も当時の風景を残しています。

### ① 宗像大社辺津宮

**露天祭祀の面影が残る高宮祭場と三つの主要なお宮がある総社**

宗像三女神の末女神・市杵島姫神（いちきしまひめのかみ）を主祭神とする宗像大社辺津宮（へつぐう）には、本殿を中心に高宮祭場、第二宮、第三宮、神宝館、祈願殿などが点在しています。

### ② 宗像大社沖津宮遙拝所

**神宿る島を彼方に望む沖ノ島信仰の重要拠点**

島そのものがご神体で、厳格な禁忌により通常渡島が制限されている沖ノ島を拝す（遙拝）場所としてできたお宮。当時は沖ノ島に向かった父や夫の無事を遥かに女性たちが祈っていました。

### ③ 宗像大社中津宮

**御嶽山の東麓に建てられた辺津宮と向き合うお宮**

宗像大社の三宮の一つに数えられ、宗像三女神の次女神・湍津姫神（たぎつひめのかみ）が祀られています。大島で最も高い山・御嶽山（みたけさん）東麓に鎮まり、辺津宮と向き合うように建てられています。

### ④ 新原・奴山古墳群

**国道495号線沿いの古墳群には沖ノ島祭祀を担った豪族が眠る**

世界遺産候補地の構成資産の一つ新原・奴山（しんばる・ぬやま）古墳群は、五世紀から六世紀にかけて築かれました。当時海を越えた交流に従事し、沖ノ島祭祀を担った古代豪族・宗像氏が眠っています。